

令和3年3月9日
足立区立亀田小学校
主幹教諭 畠山芽含

2020年度 全英連東京大会 小学校授業者発表原稿

ページ	発表文言
1	こんにちは。 東京都足立区立亀田小学校 主幹教諭 畠山芽含と申します。 2020年全国英語教育研究団体連合会東京大会、小学校の授業者発表をさせていただきます。 よろしくお願いいたします。
2	本日はこのような流れで、進めさせていただきます。
3	始めに、自己紹介をさせていただきます。
4	東西に広がる東京都、私が勤務する足立区は23区の北端に位置しており、北側は埼玉県川口市・草加市・八潮市等があります。 隅田川と荒川が流れ、豊かな水辺や緑地に恵まれています。 総面積53、25km²に、約69万人の区民が住んでいる、大きな区です。
5	小中学校につきましては、小学校が69校、中学校が35校、そのうち小中一貫教育校が2校あります。 (1)は「おきもとおうぎ」学園。校舎分離型の一貫校です。 (2)は「しんでん」学園。校舎一体型の一貫校で平成22年度創立です。

6	次に足立区の英語教育についてです。 小学校外国語教育の一層の充実を図るために、平成22年度よりALTから「小学校外国語活動アドバイザー」へ移行されています。 英語が堪能な日本人講師が区で採用され、担任との打ち合わせや授業のアドバイス等を行っています。 月に3～4回来校し、T2として担任と一緒に授業をしています。 その他、教員が自ら研究を深めるための組織として、区小学校教育研究会、区中学校教育研究会があります。 月に一回、各会場校に集まってそれぞれの教科や領域について研究を深めていきます。 さらに年に2回ほど小中合同研究会があり、互いに授業を見せたり講師を呼んで合同で学んだりしています。 今年度はなかなか例年のように集まれなかったため、各部リモートでやりとりしたり、誌面発表したりしています。
7	私は、足立区立亀田小学校に勤務しています。 東武スカイツリーライン西新井駅のすぐそばにある、創立64周年の小学校です。 26学級、約850人の児童が在籍しています。 明るく素直で元気な子供達が多く、活気あふれる小学校です。
8	私は学級担任としてずっと勤務してきましたが、 平成30年度に足立区で英語専科が導入され、 先述の小中教育一貫校新田学園で初めて英語専科となりました。

	その翌年度、平成31年度に本校へ異動し、引き続き英語専科として2年目の勤務となりました。 令和2年度である今年度は、4年生の外国語活動、5・6年生の外国語科を担当させていただいています。 3年生の外国語活動は、各担任が担当しています。
9	本校での勤務は2年目ですが、その前は10年間、新田学園にお世話になりました。 小学部には37学級、児童は約1400人、 中学部には15学級、生徒は約400人、 特別支援学級3学級を合わせて55学級、約1800人の大きな学校です。 小学校と中学校の連携がいかに大切で、児童生徒に大きな意味をもたらすかということ、 この学校に勤務させていただき学びました。
10	次に足立区の教育研究会です。 小学校は「足立区小学校教育研究会」、通称「区小研」、 中学校は「足立区中学校教育研究会」、通称「区中研」と呼ばれ、 それぞれの教科や領域ごとに組織されています。
11	次に、現在小学校では全面実施されている新学習指導要領改訂のポイントについてです。
12	大きな特徴の一つは、やはり「育成を目指す資質・能力の三つの柱」として小中高が同じ視点で整理されたということでしょう。

	この三つの柱「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」をもとに、 それぞれの教科で領域が示されています。
1 3	小学校の外国語活動及び外国語科については、文部科学省からガイドブックが出されています。 ご参照ください。
1 4	外国語活動・外国語科の目標です。 改善・充実の視点については、 1 各学校段階の学びを接続させること 2 「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にすること と明示されています。「話せるように」、ではなく、「何ができるか？」ということです。
1 5	小学校3～4年生の外国語活動、 5～6年生と中学校1年生～3年生までの外国語科の目標です。 黄色いマーカー部分は、小と中の共通の文言です。
1 6	5～6年生になると、これに「読むこと」「書くこと」が加わっています。
1 7	さらに中学校になると、「簡単な情報や考え方などを理解したり表現したり伝え合ったりする」コミュニケーションの資質・能力、と謳われています。 「コミュニケーションを図る資質・能力」の部分では、「素地」ではなく「資質・能力の育成」が明示されています。

18	「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」 目的や場面、状況等に応じて・・・再構築するためには「即興性」が求められると考えます。
19	次に、言語活動についてです。 言語活動とは、「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う活動」なので 新出表現をリピートしたり、チャンツを歌ったりというのは、児童が英語を発してはいますが そこに考えや気持ちは伴っていないので、「言語活動」には至らず「練習」となるわけです。 練習で終わってしまっは不十分なのです。 言語活動には、コミュニケーションの目的や場面、状況などを指導者側が設定する必要があります。
20	五つの領域別の目標設定には、 「話すこと」について「やりとり」と「発表」の側面があります。
21	5・6年生は教科になったので、目標に掲げられた力が身に付くように、つまり「できるように」しなければなりません。
22	ここからは、小中連携の視点から研究テーマに迫る手だてについてお話しさせていただきます。
23	小中連携の視点で考える授業づくりとして、今回この3点に焦点を当てました。

24	そして、それら3点の具体として考えたのが、こちらです。
25	「食」については、教科書のみならず東京都の独自教材である「WELCOME to TOKYO」でも、それぞれで扱っている、重要なテーマのひとつです。 東京都の小・中・高校生が、5年生から高校3年生までの10年間に渡り、手にすることができる教材です。 また教師にとっても、小中高の連携が図れるツールとなる教材です。 左から2番目の「WELCOME to TOKYO」Elementaryでは、「食」に関する内容として「給食」や「祭の食べ物」等について扱っています。
26	足立区の教科書（東京書籍 NEW HORIZON Elementary⑥）で扱う単位としては、Unit6 「Let' s think about our food.」です。 食材を通じて世界のつながりを考えたりメニューを考えたりする単位です。 「Over the Horizon」のコーナーでは 「日本の食料事情」「世界の食料事情」「食べ残しをすると・・・？」等、日本と世界の食料事情も考えることができます。 そこで、これを単に教科書の中の話でなく、本校6年生の日常として、自分達の生活につなげてみようと考えました。
27	ちょうどその頃、給食の残菜を減らそうと本校の栄養士が、4年生の総合的な学習の時間、食育に取り組んでいました。 そこで、毎日特に給食を楽しみにしている6年生にもこの取組を広げようと考え、 「栄養士M先生からのメッセージ」として外国語の授業に取り入れることにしました。

	授業には私（専科）と栄養士だけでなく、給食の時間を児童と共に過ごす担任や、 英語のサポートをしてくれている足立区のアドバイザーも入ってもらいました。 みんなで時間を共有することで、英語の時間だけでなく、 その後の学校生活でも共通理解の下、食に関する教育活動の充実が図れるだろうと考えました。
28	次に、言語活動の充実に向けて実践したことをお伝えさせていただきます。
29	言語活動の充実に向けて、例えば毎時間取り入れている Small Talk に 給食のメニューや SNS、また food loss の話題を少しずつ取り入れて、 「食」についての意識を高めていきました。
30	栄養士 M 先生が 4 年生に示したプレゼンテーションの資料内容を 6 年生用としてアレンジさせていただき、 さらに日本語表記を児童が分かる英語の表現に変えて、①と②の問題提起をしました。
31	この発問で授業を始めました。
32	身近な栄養士 M 先生からの直接的なメッセージです。 これらのスライド資料を見て、児童はとても驚いていました。 しかしその後、これら現実の改善のために自分達にできることや、 これからやってみようと思うことを、主体的に考え始めました。

	授業の最後にサプライズで登場してくれた M 先生を拍手で迎え、 伝えてくださった言葉の一つ一つに、静かに耳を傾けていました。
3 3	まず、①” What can we do?” の問題提起に対し、子供たちからは 「フードロスはよくないです。」 「ぼくは給食がとても好きです。」 「私は給食を残さないで食べられます。」 ・・・というような意味を伝えるために、ご覧のような英語による言葉が聞かれました。
3 4	また、②” What is your message for Ms.M?” の発問には、 「M 先生、毎日給食をありがとうございます。」 「残してしまってすみません。」 「ぼくのクラスにたくさんください。」 ・・・等というような意味を伝えたいために、ご覧のような英語による言葉が聞かれました。 大好きな給食と、food loss という対極の内容に、子供たちはいろいろな思いがあり、言いたいことがたくさんあるものの、考えている全てをどのように言ったら良いのか、という気持ちがあるようでした。 それでも言いたことにより近い、知っている言葉で伝えようとする子供たちの姿がありました。 言葉に詰まる友達の代わりに、途中から代弁する子もいたりして、 文法的にはまちがっていたり、日本語も混ざったりしましたが、どの児童も意欲的に話していました。 わからなかったり、言い違えたりした言葉は、クラスで共有してみんなで考えたり、指導者が言い直したりしました。

35	授業の最後に児童が書いた、振り返りの一部をご紹介します。 中学校へ行っても、毎日給食やお弁当があります。 家庭科ではいろいろな献立の調理実習もあるでしょう。 生きていく上で欠かせない「食」について、今後も様々な教科や場面で、学習を重ねていくはずです。 今回の学習が、小中学校の授業や生活を通して、子供たちの英語力や人間力を伸長する一部になってくれると嬉しいです。
36	最後に、中学校の先生方や生徒達と連携した授業実践についてお伝えさせていただきます。
37	昨年度の令和元年度は、9月に本校を含むブロック内1つの中学校と3つの小学校で取り組む小中連携事業の一環として、 5年生で研究授業をさせていただきました。 その時は中学校英語科の先生方3人に授業へ参加していただき、児童と直接「好きな教科」や「夢の職業」について話をさせていただきました。 子供たちは緊張しながらも、スペシャルゲストの先生方が発する英語を真剣に聞いたり、興味深く質問したりしていました。 児童にとっても私達にとっても、互いを知ることができた、非常に有効な時間となりました。
38	平成30年度末、小中連携の最終活動として、 中学校入学間近の小学校6年生と高校受験が一通り終わった9年生（中学校3年生）で、 英語を使ってコミュニケーションを図る授業を実施しました。

	6年生は、憧れの最上級生と間近で話ができることに興奮し、 嬉しそうに習った表現をフル活用して自分のことを紹介したり先輩達に質問したりしていました。 また9年生も、英語を学んできた先輩としてのプライドをもちながら、 6年生にわかりやすい表現を選んでコミュニケーションが図れるよう、終始英語でリードしてくれました。 互いに笑顔で分かり合おうと熱心に取り組む雰囲気の中、あっという間に時間が過ぎていきました。 参加してくれた9年生に、心からの感謝と、誇らしく思う気持ちでいっぱいになったのを覚えています。 大人である私たち教師では作り出せないような、独特の温かみと活気のあふれる授業になり、 生徒達が小学生の頃、当時担任として関わった私は、本当に感慨深くありがたい思いでした。 新型コロナウイルス感染症の影響で、大変な一年になりましたが、その分リモート学習が身近になりました。 小学生と中学生と一緒に言語活動をしようと考えたと、時間の確保や実施場所等、様々なハードルがありましたが、 今後は、リモートの活用で実践できる場面が増えてくるかもしれません。
39	英語教育に関わる小学校教師として、この3点について常に確認したいと考えています。 義務教育9年間の、学びのゴールを小中で共有すること、 そしてそのゴールに続く見通しをしっかりと持ちながら指導を続けていくこと、 これらを小中で連携していきたいです。

	児童が英語で伝えることの楽しさを感じ、自信をもって、スムーズに中学校への学びに進めることを願っています。
40	児童生徒一人一人が英語を使って自己実現を図れるよう、 これからも中学校と積極的に連携を図ってまいります。 ご清聴ありがとうございました。